

月刊

地域保健

1
2013

●新春鼎談

世界とつながる日本の保健師

●フロントランナー

佐々木秀美さん 〈登米市 市民生活部 健康推進課 課長補佐兼地域保健係長〉

●ピープル

関口祐加さん 〈映画監督〉



佐々木秀美
さん

● 登米市市民生活部健康推進課課長補佐兼地域保健係長

大切なことは一緒に向き合い、語り合うこと。繰り返し語り続けること。

人を育て、地域を変える極意

宮城県登米市

東日本大震災のときは、被災地の人たちの忍耐強さが海外メディアで驚きをもって報じられた。忍耐強く、やるべきことを黙々とこなしていくのは古くからある日本人の美徳である。

保健師にもそれと似たところがある。地域づくりは、地道に働きかけて人々を動かし地域を変えていく、忍耐と継続の産物だし、成果を声高にアピールしない奥ゆかしさも日本的だ。

ところが昨今は、市場原理主義の影響か、「結果が出なければ即退場」とばかり、短兵急に成果を求める風潮がある。忍耐や継続という価値も、地味すぎて埋没してしまった観がある。しかし、大きな山を動かすには長い年月と膨大なエネルギーが必要だ。保健師のような仕事では、忍耐と継続がものを言うことに変わりはないだろう。

今回のフロントランナーは、日本の中でもとりわけ忍耐強い土地柄で知ら

れる、東北の保健師だ。

カルチャーショック

佐々木秀美さんは宮城県の北端、登米郡石越町（現・登米市）の出身。子どものころは、共稼ぎだった両親の代わりに祖母に付き添って、病院によく行った。祖母は脳卒中で半身が不自由だったからだ。また、物心がつくつかつかないかのころから、女の人がときどき家に来て祖母の血圧を測り、話をし帰っていく姿を見ていた。それが保健師だと知ったのは、ずっと後のことだった……。そんなわけで、佐々木さんにとっては、小さいころから看護職の存在はわりと身近にあった。

高校生になり、将来を考えると、資格のある仕事をイメージするようになった。一人娘だったので両親から「手に職を持って、家に残ってほしい」と要望されていたのだ。



「私は一人娘で一人っ子。だから、寂しかったでしょう、子どもにかかわる仕事をしたいと思っていました。一方で祖母のことで昔から看護職に接していましたから、それもいいなど。そこで、両方の条件を満たす助産師になろうと考えたんです。看護学校は地元と東京の両方を選択できましたが、祖母の『いずれ石越に戻ってくるんだから、若いうちに都会を経験しておくのもいい』との助言もあって、東京の看護学校に進みました」

日本看護協会を中心に、保健師の国際的ネットワークづくりに向けて準備が進んでいる。2013年5月にメルボルンで開催されるICN(国際看護師協会)の大会で正式に発足する予定である。日本の保健師の技術と哲学は、諸外国に対して十分誇れるレベルにあるが、近年はアイデンティティーの危機にさらされているといわれる。

新しい年を迎えるにあたり、日本看護協会の中板育美常任理事、大分県立看護科学大学の村嶋幸代学長、東京工科大学の五十嵐千代准教授の3人にお集まりいただき、諸外国の保健師との共通点や違いを語る中で、日本の保健師の姿を浮き彫りにし、アイデンティティー明確化のヒントを探った。



新春鼎談

世界とつながる 日本の保健師

国際保健師ネットワークの
構築と保健師アイデンティティーの再構築

東京工科大学

五十嵐千代さん



同会

公益社団法人 日本看護協会

中板育美さん



大分県立看護科学大学

村嶋幸代さん



つまずきながらも 技術の向上を目指して 日々前進

「悩んだら先輩に聞く」を心がける3年目のひよこ

西かの子さん

●安芸市市民健康ふれあい係

◀青景は安芸市の観光
スポットのひとつ。
明治時代から伝わる
野良時計



◎文・写真
西内義雄
(医療・保健
ジャーナリスト)

「高知といえは「駐在保健師」や「孤島の太陽」と答えるのは保健師的発想だが(笑)、一般には「龍馬」の人氣が根強く、ドラマのおかげで脳役にも大いに注目が集まった。なかでも岩崎弥太郎の存在は大きく、今も生誕の地を訪ねる人は絶えない。それが今回の舞台、安芸市である。

高知市から車でおよそ1時間、太平洋を間近に見る健康ふれあいセンター・元元館を訪ねると、にぎやかな土佐弁が聞こえてきた。高知の女性を指す言葉に「はちきん」というものがあるのので、にぎやかでおてんばな人を想像しながら主役を探すと、現れたのはご覧のようなおとなしい雰囲気的女性だった。

それは部活から始まった

西さんは保健師3年目の25歳。高知市に生まれ育ち、子ども(こ)は流行

のアニメに胸をときめかせながら、漫画家や声優に憧れを抱いていた。気持ちに変化が生まれたのは、中学からだった。

「中高一貫の女子校に入り、入学してすぐの部活動紹介でJRC・ジュニアレッドクロス青少年赤十字がありました。手話やボランティアをしているとの話を聞いてるうちに興味が出てきて入部したのです」

なぜ入ったのか、詳しい理由は今も分からない。本人いわく「導かれたように入ってしまった」ようで、週に2、3日集まり話し合いを行い、週末に募金や手話、施設訪問などの活動をしていった。

「土日が潰れるわけですから普通は嫌なんでしょうが、私はとても楽しかったです。人と接すること、相手の方が喜んでくれることもうれしかったです」

好きな活動には力も入る。中学では

副部長、高校では部長も経験した。そして将来のことを真剣に考え始めたときに浮かんだのが「人を喜ばせること、楽しんでもらえることが好きで自分には看護学校に進むのが合っているのではないか」との思いだ。高校で理系クラスだったせいも、クラスの10人以上が看護師や薬剤師を目指す環境も影響したかもしれない。

看護師が、保健師が

高知から出るつもりはなかったの
で、推薦で高知女子大学(現・高知県立大学)看護学部に入學した。1年、2年、遊ぶ時間もあまり取れない学生生活も看護師になるための通過点と納得して地道に勉強を続けた。看護師を目指すことに疑問を感じることもなかった。ところが3年になり、進路を真剣に考えるようになると保健師が気になるようになった。